

事業概要書

事業名	若者の地域参画×防災教育による次世代育成事業（岩手県釜石市）				
開始日	2020年10月7日	終了日	2021年3月31日	日数	176日
団体名 (カウンターパート)	一般社団法人三陸ひとつなぎ自然学校				
担当者名	伊藤 聡	スタッフ人数	4人		

事業費総額（税込）	1,870,000円
CF事業枠	1,750,000円
その他資金	120,000円

事業目的	<p>持続的な若者の「地域参画」と「防災教育」を掛け合わせた釜石型の次世代育成モデルにより地域を担う若者の「主体性の向上」や「郷土愛の醸成」に寄与することで、未来のまちづくりや未来の命を守ることへとつなげる。</p>
事業全体の概要	<p>●<u>三陸ひとつなぎ自然学校とは</u></p> <p>東日本大震災直後の2011年3月から、釜石市鶴住居川流域を拠点に被災地支援活動を開始。緊急支援として、地域外の支援団体と地域をつなぐボランティアコーディネート、あそび場を失った子どもたちの居場所づくり、避難所の物資配達・炊き出し、避難所や在宅避難地域の方の憩いの場づくり、ボランティアと観光を組み合わせたボランティアツーリズムなどの活動を展開。震災から約1年後の2012年4月1日、任意団体「三陸ひとつなぎ自然学校」を設立（2013年5月に一般社団法人化）し、現在は「地域のために立ち上がり、挑戦する人が多いまち」の実現を目指して活動を展開している。</p> <p>●<u>取り組むべき課題</u></p> <p>若者の「地域参画」と「防災教育」を掛け合わせた釜石らしさを活かした次世代育成モデルを確立させる。</p> <p>その前提として“防災教育”は単に災害から身を守るだけでなく、その後の復旧活動や復興まちづくりに立ち向かう人材育成まで含めて考える必要があり、それを実現するためにも若者が地域と関わり、自身が住む地域との繋がりを感じることで郷土への愛着を持つこと、そして地域課題を自分ごととして捉え、そこに立ち向い続ける経験こそが生き抜く力の向上へと繋がり、有事の際に主体的に動ける人材へと成長する。</p> <p>釜石は東日本大震災の発生以前より、学校教育の中に防災教育の概念を巧みに取り入れ、多くの児童が生き抜く実績を残したまちである。しかし、教育現場が抱える様々な課題によって防災教育の効果が限定的なものになっている。その一つの要因として教員の県内全域転勤の影響が挙げられ、直接的な被災の影響が少なかった内陸部の人口が県全体の多数を占めるために、内陸部から転勤してくる教員も多い。その結果、釜石市内の小中学校に勤務する教員の約8割が直接的な震災の経験が無いにも関わらず、大きな</p>

被害を受けた地域で「いのちの教育」を教える難しさを抱えながら児童と向き合っている。震災の経験が防災教育に与える影響は大きく、地域とつながることを一つの解決方法として模索する教員は少なくないものの、日常業務の多忙さと転勤という仕組みの中で効果が挙げられていないのが現状である。

他方で大きな変化が起きづらいのが地域コミュニティの強みである。コミュニティに参加することで、若者は復興や防災を継続的に実施してきた人々から学びを得ることができる。当団体は若者が地域の一員として地域と関わる機会を提供することで郷土愛を醸成し、主体的に行動する子どもたちを少なからず育ててきた。また、2019年3月には津波伝承施設「いのちをつなぐ未来館」が完成し、防災教育推進の拠点として教育関係者をはじめとして多くの来館者が学びに訪れており、多様なセクターが連携する取り組みの推進において、拠点となる場が出来たことは非常に強みとなっている。教育機関が行う防災教育と、若者が地域参画することで得られる効果を掛け合わせた釜石型の次世代育成モデルを、教育機関と行政と地域が連携することによって持続する状態を目指す。

● パートナー協働プログラム対象事業

①. 若者が主体的に地域参画しやすい場の提供

地域貢献を目的としたコミュニティ活動やボランティア活動を通じた地域参画の機会の提供（小学生、中学生、高校生）

[期間] 2020年10月～2021年3月

[場所] 釜石市内（市内移動に貸切バス使用予定）

[内容] 地域ニーズの発生にあわせて実施。地域貢献活動を通して地元の良さを再認識し、結果として郷土愛が育まれる活動をコーディネートする。

実施予定) ※他調整中プロジェクトあり

➤ 海岸林再生プロジェクト（釜石市根浜海岸）

津波でダメージを受けた海浜環境を再生するプロジェクト。地元漁師や住民有志が主体で行っている活動のお手伝いとして、草刈りや種まきなど。期間中に数回実施予定（10/21、10/28、11月以降調整中）。

➤ 光る絵本展 in 三陸鉄道

三陸鉄道の車両をメイン会場として実施する「光る絵本展 in 三陸鉄道」へ運営メンバーとして参画。2021年3月に実施予定。

➤ 根浜あおぞらパーク

子どもの野外の遊び場事業の運営サポート。期間中の毎週末実施予定。

➤ かまっこまつり

小学生が主体となって企画するお祭りのサポート。1月実施予定。

➤ 3.11 復興のあかり

追悼を目的としたキャンドル企画。3月11日実施予定。

②. 高校生による防災・伝承活動グループの運営サポート

2020年2月に結成された釜石高校生による防災・伝承活動グループ「夢団～未来へつなげる ONE TEAM」（通称：夢団、会員：約30名）の運営サポート。

4つのグループに分かれて、それぞれ実施したい活動を出し合い議論・企画を行なう。大規模災害があった地域ということもあり、興味関心を高く持ちながら活動したい層の受け皿となっている。

[備え隊] イベント等を通して災害に備える活動を企画する

→伝承施設「いのちをつなぐ未来館」と連携した企画の実施 等

[作り隊] 防災食や災害に対して役立つアイテム作りを企画する

→防災食のレシピづくり 等

[伝え隊] 防災授業や講演等を通して震災の経験や教訓を伝えていく

→津波伝承うちわの配布、防災の専門家による勉強会 等

[繋がり隊] 他校や他地域の方々との交流を通じたつながりを広げていく

→大槌高校復興研究会との交流事業 等

※市内での活動や県内の他校との交流は移動に貸切バス使用予定

③. 若者による地域課題解決プロジェクトの伴走サポート

高校生が生まれ育った地域の課題に気づき、その解決を目的としたアクションプランを実行するための伴走サポートの実施。

当団体では、釜石市・釜石高校と連携し、高校生を対象としたアクションプラン創出事業を3年継続しており、これまで10名の高校生が参加し、6プロジェクトが創出されて実行へと至っている（今年度はコロナ禍の影響により中止）。一方で釜石高校では、SSH（スーパーサイエンスハイスクール）の取り組みの中で、ゼミ形式による探究型の授業を行っており、生徒ごとに様々なアクションプランが創出されている。ただ、その生徒を支える先生にとっては、日常業務をこなしつつ密な伴走を続けるには限界があることから、一部の生徒の伴走やプロジェクトの後方支援を行うことを想定している。SSHの授業は毎週木曜日に実施しているので、不定期で参加して生徒の個別相談を受ける。④の居場所づくりの場でも実行に向けてのサポートを行うほか、高校生発案のイベントを開催予定。

実施予定)

➤ 夢探しプロジェクト

中高生向けのキャリア教育プログラム。中高生と同数の大人が集い、一対一となって、司会者から出されるお題に沿って1分間ずつ話し、相手を変えながら繰り返すことでたくさんの大人との出会いの場とする。2018年に当時の高校2年生が発案し、その後は後輩が引き継ぎ継続している。期間中に1～2回実施予定（10/18他予定）。

※SSH（スーパーサイエンスハイスクール）：理数系教育等による人材育成

<https://www.jst.go.jp/cpse/ssh/ssh/public/about.html>

④. 上記①～③の活動を促進させるための放課後の居場所づくり

釜石高等学校敷地内において、同校の生徒が気軽に立ち寄れる放課後の居場所づくりを、釜石高校や釜石市と連携して行う。立ち寄る目的は生徒によって様々だと想定していて「自習スペース、バス待ち、大人と話す、ボランティア情報、プロジェクト実施」など、一人一人に個別最適化された育ちの場を提供する。

[日程] 週 2 回 (火曜日、木曜日)、17:00～19:30 の時間帯

[場所] 釜石高校敷地内の「セミナーハウス」

[内容] 2階建ての建物の1階はフリースペースとし、雑談やプロジェクトの個別相談を行う場として活用。2階は自習スペースで、静かな空間で勉強を行いたい生徒のために解放する。

※各イベント等実施の際には、作成した安全管理・運営マニュアルに基づき新型コロナウイルス等の感染予防対策をしっかりと講ずる。

●期待される効果

- ・ 地域貢献を目的としたボランティア活動等を期間中 5 回以上実施し、のべ 75 人以上の若者が参加【①】。また、高校生が気軽に立ち寄れる場があることで、あと一歩が踏み出せなかった層が地域参画する機会を創出できる【①、④】
- ・ 防災や伝承に関心が高い持つ層が一定数いることから、特定のテーマで地域と関わりたい層の受け皿としての機能も期待できる【②、④】
- ・ 若者自身が発案した地域貢献プロジェクトをサポートすることで、若者目線による地域活動の創出が期待される。また、より高い難易度や貢献度の取り組みをやり切ることによって、実施者本人の自信や自己肯定感の向上が期待でき、そういった経験を通して地域への愛着が生まれ、結果として未来の担い手へと成長することが期待される【③、④】
- ・ 「教育機関」「行政」「民間」の三者が連携することで、学校内の空き教室を活用した育ちの場づくりが仕組み化される【④】
- ・ 未来の命を守るための防災にとって、例えば直接的に命を守るための避難訓練や経験を次世代につなぐ伝承活動等はもちろん必要な取り組みであるが、それらに取り組む“姿勢の向上”が欠かせない要素だと考える。「取り組むべき課題」の部分でもあげたように、郷土愛を育むことこそが、地域の未来の担い手を創出することにつながるのだということを、これまでの活動の中で痛感してきた。「防災教育＝未来の地域を担う人材育成」という考え方から、日常における様々な活動を通して、若者の「主体性の向上」や「郷土愛の醸成」に寄与することは、未来のまちづくりや未来の命を守ることとなる。これまでの経験の上にさらに新たな取り組みを重ねることで、まさに『釜石らしさ』を活かした人材育成モデルの創出へ繋がるのが期待できる。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)

裨益者 (誰が、何人)

① 若者が主体的に地域参画しやすい場の提供	高校生以下の若者 (15人×5日 =のべ75人)
② 高校生による防災・伝承活動グループの運営サポート	高校生約30人がグループメンバーとして参加
③ 若者による地域課題解決プロジェクトの伴走サポート	<ul style="list-style-type: none"> ・高校生(プロジェクト実施者)10人を伴走サポート ・高校生プロジェクトに参加者として関わる地域住民 (30人×5回 =のべ150人)
④ 上記①～③の活動を促進させるための放課後の居場所づくり	(30人×8日×6ヶ月 =のべ1,440人) 10月：9、11月：9 12月：7、1月：7 2月：8、3月：8